

日本語における主観の表明 —ゼロ人称の文法—

中川 正弘

0. はじめに—文法と主観性

日本語教育で使われる教科書は、いかにも教科書的、つまり不自然さを感じる文法積み上げ式の古典的な構成のものから、実際に使われている日本語の会話を素材とする文法くさくないものになってきている。しかし、文法が教科書の最前面から見えなくなったからといって、文法を考慮しなくなったわけではない。言語理解の柱はやはり文法だろう。

成人、あるいは成人に近い外国人を対象とした教室で「日本語だけを使って日本語を教える」ことは不可能に近い。抽象的な文法概念が理解できない子供とは違い、文法を理解できなければ納得がいかない。そして、その「理解」とはどうしても翻訳、言い換えに支えを求めることになる。

言語教育では一般的に「理解」していなくとも教えた言葉を現象として「使えている」状態を作り出すことはできるだろう。だが、言葉を覚え始めた幼い子供の言語習得の様子を想起すれば分かるように、すぐにはそうと気が付きにくい誤解が多く混じっている。そして、誤解とは多くの場合「誤った」言い換えだ。言葉には言葉それ自体に内在する意味とは別に言い換えのような意味内容の裏張りが必要なのである。

旧来の文法の規則性ばかりを目立たせる教科書に対して批判的な視点から作られた「リアルな」会話を素材とした教科書では、文法はどのように扱われるだろうか。定型的、観念的な構成を厳守し、繰り返しによって文法を強調しようとはさほどしなくなったぐらいで、文法項目にほとんど変更はない。そして、その文法の扱い方も規則性の提示を第一義とすることに変わりはない。

伝統的な教科書の日本語が文法の規則性を強く示そうとして不自然、非現実的になったのに対して、「リアルな」日本語は、文法の規則をそのまま適用するばかりではおかしいと考えるのだから、要するに規則を外れている日本語ということになる。しかし、そのような規則の逸脱を教科書に取り込みはするが、それがどのように成立し、どうして受け入れられるかを解き明かそうとするわけではない。それらの言葉が実際に使われているという事実を論拠とし、推奨するだけになっているようだ。

典型的な例として、初級日本語の始めに扱う肯定の「はい、そうです。」に対する否定の形がある。「いいえ、そうではありません。」が当然形式的に対応し、当然正しい日本語であり、かつてはこれが標準とされていた。だが、これは「リアル」ではない、だから教えるべきではないとまで考えられるようになった。現在では「いいえ、違います」が標準の地位を得ている。しかし、形式的に対応する前者は普通使われず、対応しない後者が使わ

れると言うのであれば、どうしてこのような肯定と否定のアンバランスが可能なのか、二つの答え方はどう違うのか、問われれば答える用意が必要ではないだろうか。

現実に使われているという事実を提示する、これは確かに客観的で、間違いのない方法と言える。だが、証明のできない解釈は主観によってゆらぐ不確かなもののだとして、まったく考慮に入れず、間違いなく客観的ではあるが乏しい事実の提示にばかり頼る姿勢は逆にきわめて主観的な態度と見える時がある。

1. 形容詞と動詞

1.1 「ほしい」「ほしがる」と日本語における人称

動詞の人称変化は西洋言語の文法では格変化と並ぶ主要項目だ。動詞の形態が人称によって異なるということだが、この形態の違いに意味の違いがあるとは考えられていない。ただ人称代名詞とは別に人称を補助的に示すだけだ。そして、整然と配列することによって「人称」という概念を明示する。

日本語の動詞にはこのような人称による動詞の形態の変化はない。しかし、日本語教育ではまるで人称変化のように扱わなければならないものがある。

1人称	わたしはーがほしい。	わたしはーがしたい。
3人称	Xはーをほしがっている	Xはーをしたがっている。

「ほしい (形容詞) : ①自分の手に入れたい。自分のものにしたい。②そうありたい。望ましい。③自分の望む気持を他に求める語。そうしてもらいたい。」

「ほしがる (他五) : ほしいとおもう。得たいと願う。また、ほしそうな様子をする。」

【広辞苑第4版】

日本人に向けて書かれた辞書ではこのように説明されるだけで、どのように使い分けるのか、その基準となるものはない。つまり、どの人称でも使うことができると理解される。

ところが、これをよく使われる英語など西洋言語の翻訳と対照すると、まるで人称変化のように見えてくる。

I want	we want	ーがほしい	ーがしたい
he/she wants	they want	ーをほしがっている	ーをしたがっている。

こうした翻訳のように「ほしい」と「ほしがる」は人称の違いしかない同義語のような扱いを受けることが多い。

が、日本人であれば、意味は同じではない、やはり違うと言いたい。しかし、それで

は何が違う、どう使い分けるのかと質問されても、「ほしい」は形容詞で、「ほしがる」は動詞という品詞の違い以上の説明はなかなか出てこない。

日本語を学ぶ外国人は英語の「want」の翻訳としては、1人称→「ほしい」、3人称→「ほしがる」と選べるようになれば、これについては「習得できた」、「理解している」と判断されるだろう。また、日本人であっても英語の知識、能力を持っていれば、英語の「want」に対して意味内容は同じだとして、「ほしい／ほしがる」の意味の違いなど気かけず、ただ人称変化のように使い分けているにすぎないと考えれば、意味の「理解」とはどれほどのものだろうかと思えてくる。

「形容詞と動詞で品詞が違う」、だれもが納得する客観的な説明としてはそれ以上言えない。だが、品詞の違いとは何を意味するのだろうか。この形容詞と動詞は意味が似通っている、違いがないと思えるが、この区別がちゃんと習得できていない外国人が使い間違えるように、組み合わせを逆にして比べてみると、違いがかなり感じやすくなる。

A	B
わたしは <u>一</u> がほしい。	わたしは <u>一</u> をほしが <u>っている</u> 。
Xは <u>一</u> をほしが <u>っている</u>	Xは <u>一</u> が <u>ほしい</u> 。

Bの「わたしは一をほしがっている」は日本語教師でなければ間違いとまで感じないだろう。しかし、これが普通に使われるものではないとは感じられるはずだ。これでは「わたし」は純粋な1人称ではなく、自分で自分を客観的に見た場合の、わたしの意識の対象となったもう一人の「わたし」と感じられる。一方、「Xは一がほしい」では、その裏返しで、「X」を対象として客観的に見ているのではなく、Xになりすましたかのようにその視点に立ち、Xの気持ちを代弁しているかのように感じられる。

これらの比較から「ほしい／ほしがる」は英語の「want」の表すような意味内容、またこれらの言葉の語源にある動詞「欲す」の意味内容を主観的にとらえているか、それとも客観的にとらえているかを表そうとしていることが分かる。このような表現的と言える作り替えは、理解というものを単純化し、内容の論理的、客観的な構造のみを追ってはいは見えなくなる、内容の示し方を考えた言葉選びなのだろう。

日本語教育に関わる者はAが規範的と感じやすいが、AとBのどちらを使っても間違いではないことをあらためて確認すると、人称変化のように文法的、つまり客観的に思えたこの言葉選びが極めて主観的なものに見えてくる。

1.2 「好き」「好く／好いている」と意味の透過性

日本語において類義的、同義的な形容詞表現と動詞表現がでどちらでも変わらないもの

としてあるのではなく、形容詞によって主観的であることを表現し、客観的なことは動詞によって表現する「傾向」、あるいは使い分けがあることを前段で見た。そうであれば、主観的な気持ちの表明に使う英語の「like, love」で表される意味内容が、日本語の一人称では「わたしは音楽が好きです」のように形容詞（形容動詞）が用いられるのも当然だろう。一人称の「わたし」こそ主観の担い手なのだから。

しかし、「好き」と「好く／好いている」では「ほしい」の場合と少し事情が違う。「好き」の意味は形容詞（形容動詞）だと単純には言えないからだ。「好き」は動詞の「好く」から名詞化を経て形容詞化したものだ。もちろん「ほしい」も動詞「欲す」に由来するが、「ほしがる」を派生させ、これとともに安定してしまうほど形容詞として定着してしまっている。一方、「好いている」は「好き」と平行してまだまだ使われ続けている。それに何よりも「好かれている」という受動態の使われる頻度が極めて高いことを考えれば、その対照点にある能動態「好いている」の意味は「好き」という形容詞形が使われながらも、これを透過して理解されていると考えるべきではないだろうか。「好き」は「好かれる」の能動態と認知される限り、動詞としての語義を保持していると言える。

A

わたしはーが好きだ。

Xはーを好いている。

B

わたしはーを好いている。

Xはーが好きだ。

AとBを比べれば、どちらも使われているとは言いながら、「ほしい／ほしがる」と同様、単なる傾向以上の、形容詞-主観的、動詞-客観的という表現性が認められる。

「好き」に組み合わせられる助詞は「が」がまず標準と考えられる。しかし、「わたし（が）ブラジル音楽（を／が）好きなことはみんな知っている」のような例で、「が」と「を」のぶつかることを気につけない人も多いが、「が」がぶつからないよう「を」を選ぶ人も少なくない。これは、そのように「を」を選んだ時、形容詞形を表層に持ちながら、その下に本来の動詞形の語義が認知されるからと考えてはいけないだろうか。方言研究、社会言語学的統計の分析では客観的事実のように扱われるのだが、個人の言葉選びに表れる無自覚な用法の「ゆらぎ」にはこのような表層と深層の二重構造に対して判断に迷う主観の行為がかなり含まれているように思う。

「ほしい／ーたい」は使用頻度が圧倒的に高いためであろう、先に述べたように、日本語の教科書では文法と見なし、「ほしがる／ーたがる・ーがっている」と並べて、動詞の人称変化に近い扱いをする。それに対して、「好き」を「好く・好いている」と比べる教科書はない。

「好き」は単独で、それ自体で文法の一項目のように取り上げられるのが普通だ。しか

し、それは文法というよりは特異な文型という扱いだ。英語動詞の「like, love」のような意味を日本語では動詞を使わず形容詞（形容動詞）を使うことに注目させる。あまり使う必要がない「好く・好いている」を横に並べれば学習者を混乱させるだけと考えるだろう。

そのように形容詞色を強調した結果、教科書のずっと後の課で受動態を扱うようになって、「好かれる・好かれている」という頻度が決して低いとは思えない表現が取り上げにくくなる。

「好く・好きます」をそのまま使うことがまれなのだから、基本的な動詞に数えられず、受動態を教える場合に無視されたり、例外扱いされたりしてもしかたがないとも思えるが、このような主要な動詞にはやはりそれなりの扱いが望まれる。

1.3 「嬉しい」「喜ぶ」と品詞性

「ほしい」「好き」は動詞から派生した形容詞だが、次に、語彙としては別起源でありながら、その選び方に同様の選択基準が見られるものを取り上げる。

「嬉しい」という形容詞には、「ほしい」にとつての「欲す」、「好き」にとつての「好く」のような語源となる動詞がない。「ほしい」から「ほしがる」ができたように「嬉しいがる」という派生語はあるのだが、「わたしは嬉しい／Xは嬉しいがっている」には「わたしは飲み物がほしい／Xは飲み物をほしがっている」ほどの類義感はない。

「嬉しいがる」は客観的な表層の記述ではなく、慎み深く見せない方が望ましいこの感情を露骨に見せる積極的な行為と理解されるため、単純に人称が違う表現とは感じられない。これは日本人の行動様式、文化・習慣の問題だ。「嬉しい」が一人称に相応しい主観を表す形容詞であるのに対して、三人称の人間について客観的にその心情を表すような場合に使われるのはどんな言葉だろうか。「嬉しそう」という接尾辞を用いた表現もあるが、何と云っても別起源の動詞「喜ぶ・喜んでいる」がよく使われている。

何かプレゼントをもらった時、「これを私と妹たちにくださるんですか。嬉しい。みんな喜びます。」のような言葉の組み合わせは極めて日常的だが、日本人は「嬉しい」のはだれか（わたし）、「喜びます」の主語はだれなのか（妹たち）、これだけの言葉で理解する。

わたしは嬉しい。

わたしは喜んでいる。

Xは喜んでいる。

Xは嬉しい。

これらの形容詞、動詞も前の例と同様にどの人称で使っても文法的に間違いにはならない。しかし、このように主語が隠されていてもすぐ特定できるということは、形容詞と動詞という性質を土台に、「ほしい／ほしがる」「好き／好いている」などと共通の選択基準

のようなものがあることを意味していよう。

2. 助詞の選択と構文の人称

2.1 主語の「が」、目的語の「が」

「わたしはコーヒーが飲みたい」「彼は日本語がわからない」のような構文を説明するとき、「対象をガ格で表す」という言い方がよく用いられる。しかし、それでは「が-主語（主体）」「を-目的語（客体）」という基本として示す助詞の定義と合わない。「コーヒーが」「日本語が」はどうして対象と言われるのだろうか。

このような説明は、暗に日本語の構文を英語の構文と比べ、英語を標準と扱う場合、つまりこの文の英語翻訳を想定し、それをこの日本語の意味内容と扱うような場合に可能となる。

わたしは <u>コーヒー</u> が飲みたい。	彼は <u>日本語</u> がわからない。
I want to drink <u>coffee</u> .	He doesn't understand <u>Japanese</u> .

この英語で coffee、Japanese は確かに動詞の対象となる目的語であり、この日本語文を英語の翻訳だと考えれば、「コーヒーが」「日本語が」は目的語、対象だと言うことができる。

外国人の使う日本語ではその意味内容が英語（母語／第一言語／媒介言語）であることが多いのだから、説明をそのような実状に合わせていけないわけではない。日本語教室ではそれが現実的、実践的だ。また、英語をある程度習得している日本人の場合、英語を使って考えたことを意味内容とし、それを翻訳的に日本語で表すことも多々ある。習得された複数の言語は脳内においてパラダイムをなしており、日本語は日本語本来の意味で使うことも、英語の翻訳として使うこともできる。

しかし、日本語の意味に英語の意味など想定しない日本人は「ーがーたい／ーがわかる」で「対象をガ格で表す」と考えにくいのではないだろうか。

Do you hear <u>that voice</u> ?
あなたは <u>あの声</u> が聞こえますか。
あなたには <u>あの声</u> が聞こえますか。

この例でも「あの声」が対象、目的語だと言えるのは、英語の構文を標準として念頭に置いた場合だ。日本語の「あなたは」を主題化した主語と考えれば、当然「あの声」は目的語、対象だと見える。しかし、「あなたは」ではなく「あなたに／には」と「に」によ

って格を明示した時、「主語・主体を二格で表す」とまで言おうとする日本語教師はいるだろうか。それでは日本語の構文、格の組み合わせを転倒させるようなものだ。

この文では、英語では「Do you hear that voice?」と、「主語-あなた」「目的語-あの声」と見ている状況を、日本語は「主語-あの声」、「間接目的語（与格）-あなた」で、つまり Does that voice come into your ears?*のような構図でとらえていると考えるべきだろう。

2.2 ゼロ人称の構文

1.1 で確認したように日本語は人称によって「～たい」と「～たがる・～たそう」を使い分ける。このことは日本人が一人称と三人称を西洋言語の活用表で見ると対等に並べられるものではなく、根本的に違うものと見なしていることを示していないだろうか。

そして、「～たい」に組み合わせる助詞として「が」「を」のどちらが基本なのかがよく問題になる。「ほしい」「～たい」には「が」が、「ほしがる」「～たがる」には「を」が一般的に組み合わせられる。これで済めばすっきりするのだが、「ほしい」「～たい」には「を」も使われるため、その選び方が問題になるのだ。

「～がほしい」と「～をほしい」、「～が～たい」と「～を～たい」のように格表示としては正反対と言える二つの助詞が使われるのだから、文意がどう違って来ると問うてもよさそうだが、意味はまったくと言っていいほど区別されない。

しかし、日本語教育ではどちらでもいいという態度はとりにくいせいだろう、これについては次のような考え方、判断が出てくる。

「～たい」の目的語は「が」で表されることも「を」で表されることもあります。「が」の方が本来の形（規範）だとする意見が強いですが、現在の実際の用法としてはこれは妥当ではありません。

次の表は「芥川賞全集」などを資料に「が」と「を」の使用回数を集計したのですが、これを見ると、全体の使用頻度などどの点をとっても、「を」が一般的であることがわかります。（データ及び詳細は庵功雄（1995）参照）¹

ここに紹介されている数量的な事実による解決が一般的に「客観的」で望ましいと考えられる。しかし、それでは「が」「を」のどちらを使っても意味は変わらず、基本的に助詞はどちらを使ってもいいと言っていることになるだろう。

「が」で目的格、対象を表すという言い方はそのような認識から生じる。しかし、二つの助詞の選択基準が示せないから助詞は一つだけになるほうがいいと考え、残すべき一つを決定するのは客観的な統計データだというのはいかがなものだろうか。数値の圧倒的に大きな方が「一般的」で、数値の小さなほうは誤差のようなものと見なすというのはあまりにも問題を単純化している。数値の大小をそのように主観的に解釈する前に、使い分け

の判然としない二つの助詞が使われているという「客観的事実」のあることを忘れてはいけない。「が」を使う場合と「を」を使う場合とでいったい何が違うのだろうか。

曖昧なまま規範とされていた「が」に対して、このように反論のための統計研究が行われること、またその結果が受け入れられることは日本語教育では教師の多くが「を」だけを使い、「が」を使わないで欲しいと願っていることを示しているのかもしれない。「わたしはーが食べたい」より「わたしはーを食べたい」のほうが文法をすっきり説明できるからとも言えるが、「が」の説明を実はせずに済ませていることを後ろめたく感じるせいだろう。

動詞の主語、主体は「が」で、目的語、対象は「を」で示すのが助詞の基本としながら、「ーたい」と組み合わせられる「が」については目的語、対象を「が」で示すと言う。そのような例外の混じるのが自然言語だという姿勢をとる。二つの助詞の使い方について質問された場合、「を」でも「が」でも対象を示すと言えば答になっているように見える。しかし、それでは、対象を「を」で示す場合と「が」で示す場合では何が違うのかという質問には答えられない。

ところで、ここに紹介された研究には非常に興味深い日本語の問題が見えている。普通の日本人の使う日本語には間違いも多いし、「方言差」も多い。だから、日本語文法の規範を求めるための用例データとしては文章がよく吟味されている小説、それも日本語文化の頂点とも言える純文学の代表的作品が理想的だと考え、これに依拠する。そして、使用例を数えると、「ーたい」と組み合わせられる助詞は「が」ではなく「を」が圧倒的に多い、だから「が」を規範と考えるべきではないと結論する。「を」を規範と扱うべきだと言いきることはためらわれたようだが、そう言っているのも同然だ。

しかし、この統計データで本当にそう言えるだろうか。「ーたい／ーたかった」を小説中から探し、その直前にどちらの助詞が使われているかだけを見ればそうなるだろう。だが、どんな主語が組み合わせられているかを考慮しただろうか。

先に見たように、「たい」はどの人称でも使えると言えば使えるのだが、一人称以外は一人称的な主観の投影であり、第三者には「たがる、たそう」を使って自分とは区別しようとするのが基本だ。小説で「たい」はどのような主語と組み合わせられているだろうか。

小説には語り手による語りの部分と登場人物の会話・独白の部分がある。一人称小説であれば、「わたし」が語り手となり、それ以外の登場人物はすべて三人称、主人公が三人称であれば登場人物全員が三人称ということになる。

すると、小説作品中に現れる「たい／たかった」で、普通の一人称の感覚で使われていると言えるのは、さまざまな登場人物が一人称で話す会話中のものだけになるだろう。参照された研究でそのような選別をしているとは思えない。おそらくそれでは用例があまりに少なく、研究調査の体をなさなくなってしまう。

三人称で「たい／たかった」を使う例、そして一人称でも「今・ここ」にいる「わたし」ではなく、過去の「わたし」、それも虚構作品の登場人物という三人称的性格の強い対象と組み合わせられた例が大半だろう。

三人称小説では作中に語り手の姿はない。しかし、語りのあることが語る者のいることを示す。例えば「Xがいる」という言葉は「X」の存在しか示さないのではない。この言葉を発する者、Xを見ている者がいることを間接的に示している。語り手は「わたしはXを見ている」と自己言及することも可能なのだがそうしないだけだ。

小説の語り手は登場人物たちの気持ちを「Xは水を飲みたがった／飲みたそうだった」ではなく、「Xは水を飲みたかった」のように「たい」を使って表そうとする。「たがっている、たそう」を使えば、その人物の気持ちを完全に理解できないと言っているに等しい。人物の内側に視点を置き、一人称的に主観を代弁する。作中には姿を見せず、いわば「透明」なのだが、そうすることで語り手は全てを知る「超越的」な地位を占めようとする。

一人称小説ではどうだろうか。これなら「わたし」が作品中にいる。すると、現実世界と同じで、日本語の言葉選びの規範を求めていいように思える。だが、こちらもやはり普通の使い方とは言いにくい。一人称ではあるが、作中の人物、そして一般的に過去の人物だからだ。作品を書く人間から見れば、作中の「わたし」は他の三人称の登場人物と同様、造形し、考察すべき「対象」だ。従って、どうしても三人称的な性格を帯びる。

このようなことを踏まえて、文で示される状況に「わたし」がどのように関わるかまとめてみよう。

Xは水を飲みたがっている／飲みたそうだ。【三人称】	
あなたは水を飲みたがっている／飲みたそうだ。【二人称】	
あなたは水を飲みたい。【二人称】	
わたしは水を飲みたい。【一人称】	
わたしは水が飲みたい。【一人称】	

動詞「飲む」については「X・あなた・わたし」が主体で「水」が対象なのだが、このような文を発する者（語り手）を考えると、その者にとって「X・あなた・わたし」はどれも対象と言える。一人称の「わたし」もすべての人称の中から選択的に言及される対象だ。

一番下の「わたしは水が飲みたい。」では、先に述べたように、「水が」を主語と考えようとはまずしない。「わたしは」が主語だとすれば、論理構成から言って「水が」を目的語、対象と考えたくなる。

しかし、ここで考え方を考えてみよう。一人称の二つの例文にもう一つ加える。

- わたしは 水を飲みたい。 【一人称】
 わたしは 水が飲みたい。 【一人称】
 (わたしは) 水が飲みたい。 【ゼロ人称】

小説に語り手がいるように、実際に使われるどんな言葉にも発話者がいる。ここに書き加えた例文は一人称の「わたしは」を省略しただけのように見える。それは「わたしは水が飲みたい。」を標準と考えるからだ。しかし、小説の語り手が自己言及せずに「Xがいる」と短く語るのと同じで、自己言及を含まない構文は簡潔で極めて自然だ。対話の場で発言する前に頭の中で考える時、あるいは一人きりで考えごとをする時、「わたし」という言葉で自己言及が必要な場合がないことはないが、そのような必要のない場合は決して少なくない。考える主体はその意識の対象のみを言葉にする。そのような言語化されない(わたし)という主体は「ゼロ人称」と呼ぶべきだろう。



この構文のとり方を原点、基準と考えれば、先の一人称の二つの例文はすこし違って見える。一人称文の主語が省略されてゼロ人称文ができるのではなく、ゼロ人称文に自己言及の主語「わたしは」が付加されて一人称文ができると考えられる。「わたしは」は過剰なのだ。

文体0 水 - 飲みたい。 (意識活動)

- 文体1 水が飲みたい。 【自己言及- / 客観性- / 形容詞構文】
- 文体2 わたしは水が飲みたい。【自己言及+ / 客観性- / 形容詞構文】
- 文体3 わたしは水を飲みたい。【自己言及+ / 客観的+ / 動詞構文】

日本人はおそらくみな名詞の「水」と形容詞の「飲みたい」の二つの言葉を連想としてただ結び付けるだけで考える。そこには主語も言葉を繋ぐ助詞も必要ない。そのような二つの言葉が最も簡潔な文となるために必要な手続き、それが助詞「が」の付加だ。名詞と形容詞の結合なのだからだれにも納得がゆく。これに自己言及の「わたしは」を付ければ、

多くの言語に共通し客観性を有する論理単位「主体-動詞-客体」に似た三語の組み合わせができる。しかし、文体2のように「水が」となる時、「飲みたい」は文体1のゼロ人称構文と同様、動詞ではなく形容詞の扱いのままなのだろう。この場合「わたしは」は主語ではなく、まさしく主題だ。文体2のこの文は話者にとってゼロ人称構文とほとんど同じと感じられるに違いない。ところがその発言を聞いた他の人は違う。話者以外の人間にとって「わたし」は「この人」と置き換え可能な三人称的な対象であるため、「わたし-水-飲みたい」の三語を動詞構文で受け取る。これらの文体の違いは日本語における主観という「内なる意識」の扱いを如実に示している。

先の引用中で批判された、『**が**』の方が本来の形（規範）だという感覚は、歴史的に見てかつて多かったという不確かな事実や記憶からではなく、考える主体の意識の自然なあり方をこの構文が反映していることから来るのではないだろうか。

「たい」と結合する千の動詞のうち一つしか「**が**」を使わず、他はすべて「**を**」という統計結果が出たとしても、単純に「**が**」は規範ではない、多い方を規範とすべきとは判定できない。基本語中の基本語、たとえば人によっては四六時中、頭（心）の中で使っているが人前では謹んで口に出さない「食べたい」と、使う機会がほとんどない動詞に「たい」を付けたものをどちらも同じ一件とは扱うべきではないだろう。

3. 他動詞文／自動詞文の選択とゼロ人称

文法の基本は規則性、形式における対応であり、教科書では以下のような応答が示される。

【他動詞】

Q1「論文のテーマは決めましたか？」 A1「はい、決めました。」

このような形式的対応は日本語と英語で変わるわけではない。しかし、日本語特有の類義語がある。次のような自動詞だ。

【自動詞】

Q1'「論文のテーマは決まりましたか？」 A1'「はい、決まりました。」

「わたし-テーマ-決める」のように「決める」という行為には当然主語、主体と目的語、対象が組み合わせられる。このような行為は人間の行うものだ。ところが、日本語では関係する項目の中から関心のあるものだけにスポットを当て、まるでだれがそうしたか考慮しないかのように、「テーマ-決まる」という行為者のいない構文も使われ、対象となって当

然のものが主語、主体として表される。「決める」という行為を担う主体のいることはちゃんと理解されているのだが、言葉ではその行為の結果だけを捉えようとする。

動詞に関わる主体も対象も出ていることで、客観的に見える他動詞文と比べ、自動詞文はひじょうに勝手な、つまり主観的な表現の仕方にも見える。しかし、他動詞文にしてもこの動詞に関わるさまざまな関係項目（時間、場所、方法・・・）すべてがいつも表されるわけではないのだから、五十歩百歩なのだろう。現実と言葉によるその記述が同じになることはない。

このような他動詞構文と自動詞構文の併用には興味深い側面がある。日本語の教科書では他動詞構文の質問に他動詞構文で正しく答えることを学ばせる。自動詞構文についても同様だ。応答形式の規則性は文法の柱なのだから。ところが、次のような応答はどう考えればいいたろうか。

【他動詞】

Q1 「論文のテーマは決めましたか？」

【自動詞】

A1' 「はい、決めりました。」

【自動詞】

Q1' 「論文のテーマは決めりましたか？」

【他動詞】

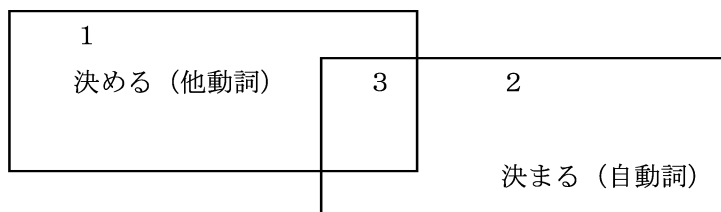
A1 「はい、決めました。」

このようにねじれた組み合わせでも応答が可能だということは普通示されない。他動詞構文に対して他動詞構文、自動詞構文に対して自動詞構文で答えるのは当然正しいので、そればかりになる。しかし、このようなねじれた組み合わせは学習者を混乱させるだけだから教えない方がいいとまで考えるべきだろうか。ねじれた組み合わせが可能だと教えられていないと、学習者はそのような答え方は言うまでもなく間違いなのだと考える。これでは不作為の嘘になってしまう。

どちらの構文を使うかは質問をする者とそれに応答する者それぞれが自分で選ぶ。二人の人間の主観的な判断なのだから、同じになる可能性はあっても、同じになる必要はない。

このような組み合わせを「文法」として扱うには、現実にはこのような応答形式が使われているという事実がありさえすればいい。しかし、どうしてこのような応答が可能なのか考えることもできる。

「決める」と「決まる」は他動詞と自動詞ということで文法的質は違っているのだが、意味に共通する領域がある。



二人の日本人が対話していて、質問と応答における他動詞構文／自動詞構文の選択で同じものが使われていないのに「正しく」応答していると感じるということは、この話題の要点がそれぞれの判断で選んでいる動詞の意味の重なり合うところにあると承知していることを意味する。他動詞文と自動詞文を比べると他動詞文が客観的に見えなくもないが、どちらかを選ぶのだから結局はどちらも主観的ということになる。しかし、この共通領域はどちらでもあり、どちらでもないということで、中立の客観的な第3の意味領域と言えそうだ。これが成立していないなら、答え方に質問と同じものが使われていないと、当然間違っていると感じられるはずだ。このような組み合わせが可能だと教えられなかった外国人はそうなっている。

このような日本語の認識はどこから来るのだろうか。この動詞の形成過程も考慮に入れるべきだろう。

古語		現代語
決む	→	決める（他動詞） 決まる（自動詞）

「見つける／見つかる」には「見つく」、「かける／かかる」には「かく」が古い形としてあると同様に、「決める／決まる」には「決む」がある。現代語では「える」「ある」が付加された形で分化して安定し、他動／自動の機能性が明確になったが、古語においては「決む」という一つのかたちで他動詞としても自動詞としても使えていた、と言い切れることは難しいが、「決める／決まる」という語形の核とだれにも感じ取れる「決む」という語形のあることが「決める／決まる」で意味の重なる領域が第三の動詞のように成立する条件となりえるだろう。英語の動詞には一つの語形で他動詞にも自動詞にも使い分けるのが多い。

もう一つ考えられるのは、前段で論じたゼロ人称という視点のとり方だ。既に述べたように、一人称-二人称-三人称で組み立てられるパースペクティブは話し手、聞き手、第三者が交替可能な人称関係の中で共有できる客観的なヴィジョンを生む。動詞が本質的に主体と対象を持つものであれば、これらすべてが構文に表れる。「わたし／あなた／X-テーマ-決める」という他動詞文はそのような性質を帯びている。

一方、他動詞文「わたしはテーマを決めました」のように自己言及をしないゼロ人称の（わたし）は当然その行為、変化を表す動詞の主体でありながら、対象と動詞だけで成立する構文を好むのではないだろうか。

英語など西洋言語にはない「(わたしは) テーマが決まりました」という自動詞文は日本語にゼロ人称構文が基本的な視点の取り方としてあると考えれば説明がつく。「わたしはテ

「テーマを決めました」のように「わたしは」は主語であると言にくい「わたしはテーマが決まりました」の「わたしは」はこの構文にとっては過剰な要素として付加されているのである。この過剰な付加を可能にしてくれるのが、主格でも目的格でも、どんな格でもないのだが構文に加えられる、助詞「は」による「提題」の文法ではないだろうか。

4. おわりに

用例の頻度を調査し、その結果出た数値を主張の根拠とする研究は多い。主観はできる限り排除し、客観的な姿勢を貫かなければいけないと考える。それはいい。しかし、その結果をもとに正しい／間違いを判定するとなると、客観的で公正とばかりは言えなくなる。世界は別に客観的な事象だけで構成されているわけでない。無数の主観で構成されている多面的な世界のごく一部がそう見えるだけだ。

この「部分」でしかないものをまるで「全体」であるかのように扱うことは修辞学で言う「提喻（シネクドク）」に似ている。「部分」によって「全体」を表すことは極めて一般的な言語現象なのだが、それは人間が意識しないままやってしまう多くの事実の変形による誤認を説明してもくれる。客観的に捉えられる部分をまるですべてであるかのように扱い、それを絶対視する姿勢は皮肉なことに極めて主観的だ。主観的な方法、客観的な方法の二つからどちらかを選ぶとき、その選ぶ行為自体が主観によるのだから、わたし達は主観から逃れようがない。

本稿では一般的に客観性だけに依ろうとする文法とそこから切り捨てられていた主観との関係を考えて。そして、日本語に文法とも修辞とも見なし難い、前言語的特徴を確認したのだが、このようなものをすべて定位できる視点、学の確立が望まれよう。（了）

¹初級を教える人のための日本語ハンドブック、スリーエーネットワーク、pp. 144-145